

石田波郷と東療

国立病院機構東京病院 副院長
庄司 俊輔

石田波郷（1913-1969：本名哲大（てつお））（以下波郷）という人物をご存じだろうか。彼は、松山生まれの昭和を代表する俳人のひとりである。松山中学時代に、水原秋桜子の主宰する「馬酔木」に入選し、その縁で上京した後、数々の句誌の同人となり、「馬酔木」の編集長をする傍ら、弱冠24歳で新俳句雑誌「鶴」を創刊主宰した。しかし、昭和18年に戦争にて中国北部に召集され、その地で左肺湿性胸膜炎に罹患して現地の療養所に入院。症状が好転しないため昭和20年1月に内地へ送還された。やがて終戦を迎え、体調も回復したために俳句活動を再開するも、昭和22年肺結核が再燃し、医師より右肺上葉肺浸潤に対する胸郭成形術を薦められた。

昭和23年5月、波郷は結核療養と肺成形手術のために、当時「東療」と呼ばれていた国立東京療養所（昭和37年に国立療養所清瀬病院と統合して国立療養所東京病院と改称：以下東京病院）に入院した。このあと、波郷は昭和44年に東京病院で亡くなるまで、東療（東京病院）に入退院を繰り返し、同院の病床で多くの時間を過ごし、幾多の秀作を生み出した。

草木瓜（ぼけ）や 故郷のごとき 療養所 波郷

入院後しばらくは体調不良で手術が出来ず、昭和23年10月に、1回目の成形術を行い、右第1-4肋骨を切除した。やはり波郷にとっては衝撃の体験であったようで下の句を詠んでいる。その後、2回目の成形術で、右第5-7肋骨を切除。次いで翌年に、遺残空洞への合成樹脂球充填術を行い、その後病状は快方に向かった。

たばしるや 鵲（もず）叫喚す 胸形変 波郷

当時の東療では、患者の俳句活動も盛んで『松濤』という雑誌を出しており、波郷はその選者と指導を依頼され、昭和27年まで続けた。それらの患者の中には、後の推理作家結城昌治もいた。ちなみに東療には、波郷と前後して、吉行淳之介、福永武彦などの作家も入院している。

入院患者は外界と切り離されていたが、それだけに社会的行事への関心は強く、節分、七夕、星祭、クリスマスなどが行われた。波郷は七夕の際に、患者の書いた短冊に“惜命（しゃくみょう）”の文字を発見した。下の句は、患者の切実な気持ちを反映しており、同文字をタイトルとする句集『惜命』に納められた。『惜命』は「療養俳句」の金字塔として当時非常な評判を呼び、同句はその中でも最高傑作とされる。

七夕竹 惜命の文字 隠れなし 波郷

当時は、清瀬全体では5千床、東療だけでも2千床の結核病床があったとされている。外科治療以外に有効な抗結核薬もなく、大気・安静・栄養が治療の主軸であったために、東療内の自然林の中に、軽症患者の作業療法病舎として72棟の「外気舎」が建てられた。下の句のように、苦しい闘病生活の中にも楽しいひとときがあったようである。外気舎は昭和41年に廃止されたが、そのうち一棟が記念館として東京病院裏手に、今も保存されている（写真）。

露の夜の 外気舎の灯の バーベキュー 波郷



時代は移り、抗結核治療のめざましい進歩もあって、清瀬地区の結核病床は、東京病院（現在は国立病院機構東京病院）に100床、近くの複十字病院に60床を残すのみとなった。この地域には、国公立、私立を合わせて15の結核療養所があったとされるが、現在、そのほとんどは一般病院や療養施設、または公的施設に変貌し、なかには廃院により広大な空き地となっているものもある。しかし、跡地に商業施設や住宅が建設されることはほとんどなく、現在でも、都心池袋から30分の立地とは思えない、静かで緑の多い街のままである。東京病院も、改築により高層化した病棟部分を除けば、当時の面影を強く残している。外気舎の付近は、夜になると、ほぼ漆黒の闇に包まれ、虫の声以外に音も聞こえない。空を見上げれば満天の星で、おそらく、波郷も同じように見上げていたのではないかと感慨深い。

遠く病めば 銀河は長し 清瀬村 波郷

去年は、波郷生誕100年ということで、清瀬市と当地の俳句同好の士が中心となり、東療跡地の一部である清瀬市中央公園に、「石田波郷句碑」が建立された。また、没後40年を記念して始まった「石田波郷俳句大会」も毎年行われ、今年で6回目となる。全国から7千句近くの応募があり、年々増えているとのことである。石田波郷を通じて清瀬市を「俳句の街」にしようとする試みであり、東京病院としても末永く協力していきたいと考えている。